

子どもの本質をとらえ荒れを変えていく力を求めて  
～「荒れる」子どもたちに教えられたことを読んで～

薦田 侑奈

現在の日本の教育には様々な問題があげられる。時代の変化に伴い子どもたちの姿にも変化が見られ、従来通りの指導ではうまくいかなくなってきたという話もよく耳にする。最近のニュースでは、仕事の重さからの「心の病」にかかる教員が今年5400人にもなり、過去最高の人数となり17年連続の増加となった。これにおける対策も必要とされるさなか、教員自身もそれに立ち向かう姿勢や対策を自ら講じていかなければ対応できなくなってきたであろう。

私は幸いにも今年、教員採用試験に合格し2011年の春からは小学校教員として教壇に立つ予定である。大学を卒業して4月からいきなり他の教員と同じ立場として働くということに関して、実践経験の少なさから不安もある。実践力では経験のある教員の方々にはかなわないがゆえ、今の私にできることは現場に出るまでの残りの期間、教育に関する知識をしっかりと身につけて自分なりの考えを持って実践に役立てることだと考える。また、私はこれまでの人生を振り返って「荒れた」学校生活というものを経験したことがない。もちろん、人間関係でのトラブルやちょっとした問題は多々あったが、学級崩壊で授業が成立しなかったことなどはない。教育実習や学校支援ボランティアなどで私が「教員」という立場に立った時でもそうであった。ゆえに、「荒れた」子どもたち、学級において自らの経験を生かした教育活動はなかなか難しいと考えた。そのことがこの本を読もうと思ったきっかけである。

著者の今泉さんは小学校教員として勤務し、荒れた学級、荒れた子どもたちを経験してきた。その時の経験やエピソード、そして変わっていく子どもの姿やそんな子どもたちから学んだことがこの本には書かれている。本の中での「I. 子どもたちの中の新しい「荒れ」の広がり」には、荒れていた5年生が6年生に進級する際に担任になる先生がおらず結果的にその先生が引き受けたという話があった。私自身、読んでいて覚悟はしていたがその「荒れた学級」の様子がひしひしと伝わってきて、恐ろしくなった。教師が何を言っても言うことを聞かないどころかかえって反抗されてしまう、心が通じ合わない、言葉が響かない、そのことの辛さがもろに文章の中に現れていた。学級の中でのいじめや暴力問題も教師の目の前で当たり前のように発生していた。

荒れた学級を担当したときに大切なのは、最初からきちんとさせようと思わずゆっくり待つ姿勢で徐々に高い峰を目指して

いくことだと今泉さんは言う。私自身、教育実習などの経験から教師としてどこか見栄をはってしまいそうになることが多々あった。私が指導しなくては、私が何とか教えなくては、という思いばかりが常に先走っていたような気がする。特に小学校教員の場合、ほとんどの教科を担当が一人で担当するということもあり、子どもと接する時間は必然的に長くなる。自分の体裁を保とうとしたり、時に自分の意志の赴くままに子どもたちを導いていこうという思いも出てくるのではないかと思う。しかし、見栄を気にしては子どもはすぐに見抜く。長い時間接する小学校教員ならなおさらである。同時代を生きる一人の人間として対応しなければならない。また、教師自身も「教師」という立場と同時に人間としての自分自身の姿を子どもにさらけだしていくことで、心の通い合いを徐々に成立させていかなければならないと感じた。また、これまでの日本の教育の中には子どもたちを“しっかりと教え込まなければならない”という管理の対象すなわち「客体」として扱っている様子があると今泉さんは言う。しかし、子どもこそ学校生活の主人公であり、成長していくのは子ども自身である。ゆえに、子どもを主体として見ていく視点こそ必要だ。しかし、私は時に子どもを「主体」の上での「客体」として見る必要もあるのではないかと感じる。これまでの考え方が必要だというわけではない。主体である子どもたちに対して、教師として自らを反省し子どもたちにおける関わりを考える際には子どもを客体としてとらえ、そこから内省への動きも教育活動の上では不可欠だと考える。教師が子どもに与える影響は大きい。そして、その指導の在り方は目の前の子どもによって大いに変わりうる。その時に、子どもたちが学校生活の中で主人公としてどのようにしたら輝いていけるか、動いていけるかという主体としての子どもと、そのために教師として何ができるか、自分の言動によって子どもがどのような返し方をしたか、どのような反応があったかという客体としての子ども、その両者の視点が必要なのではないか。実際にはこの狭間で揺れるのが教師なのかもしれないが、適切な視点の持ち方・切り替え方も教師に求められる力量なのかもしれない。

学校生活の中で、大きな問題となっている「いじめ・暴力・暴言・仲間外し」。これはどこの学校でもどこの学級でも悲しいことにちょっとしたきっかけで起こりうることであり、これらの行為は教師として許してはいけないことであり、これによる

自殺者をだすことは何があっても避けたいことである。本の中でも、これらの行為は日常に及んでいた。過去に今泉さんはこれらを「紙上討論」という方法で徐々に解決した。子どもたちに毎日朝の15分間プリントを配り、感想を書かせる。何についての感想かという、そのクラスで起こった事実の文章を2〜3つ選んで、それに対してであったり、友達からのメッセージに対してであったり、自分の経験などである。匿名性や家への持ち帰りなどに十分に配慮して行われたこの紙上討論では徐々に正直に自分の気持ちを述べる子どもが増え、それにより子ども自身も自分のした行為を直視せざるをえなくなり、またいじめや暴力などを受けた子どもの痛みを知り、「本当はみんなと仲良くしたいんだ」「今までごめんなさい」という声が増え、クラスが皆いい方向に向かっていったという。教師も子どもからのメッセージに赤ペンでコメントを加え、事実を伝えてくれた勇気をたたえたり、共感のメッセージを書いた。「紙に書く」ということは、記録に残る点ではしっかりと配慮することが必要であるが、紙に書くことで改めて自分の気持ちと向き合うことができる点でも優れている。人と話すことが苦手な子どもにとっても正直な気持ちを伝えやすい手段だと感じた。

子どもが荒れる原因は必ずどこかにある。本来、子どもは幸せであれば人を傷つけたり攻撃したりはしない。その原因を教師は把握しながら子どもと日々接する必要がある。今泉さんは、学級の立て直しの上で、一番関わりの多い授業時間にも手を抜くことはなかった。「何のためにわざわざ学校に来て勉強しているのか」という子どもたちの問いに答える授業をするべきだという。本を読んでいて、授業の導入、入り口で子どもたちの知的好奇心をひきつける魅力的な授業、推理・想像しながらみんなで発見していく授業、子どもたちの失敗・間違いを何より大切にす授業、を非常に意識しているという印象を受けた。子どもの発言の一つ一つに丁寧に対応し、間違いであっても「それは間違いだよ」とさっと流すことなく「そのような考え方をできた君はすごいね」とほめる。それによって子どもは自分の意見がたとえ間違っているとしても教師に認められたことで安心してクラス内でも発言ができるようになる。まずは、子どもが自由に自信を持って発言しあえる環境こそ授業において大切であり、それは学力をつけることだけでなく人間性の形成にも大いに関与していることを感じた。権力を持っている子どもの意見に周りの子どもがしたがったり、間違いを恐れたり、そのようなことをしては学びではない。間違いは物事の一面をとらえているということであり、その物事の本質につながる大切な入り口である。授業は常に子どもが未知の世界に入って行く時間である。子どもがいかにわくわくするような授業をするか、

子どもが「こう思ったから発言したい！」という授業はどうしたらできるのか、教師として十分な教材研究を行い、教師自身も授業を楽しめるようなものができればいいと思う。

この本を読むまで私は、授業におけるあいさつ、いわゆる「号令」ははじめをつけるために授業の始まり・終わりにおいて非常に重要なものだと考えていた。しかし、荒れた学級を担当した場合はきちんとした号令はなかなかできない。そして、そこにも日本の過去の軍国主義の一面も見られるという。号令のような外的緊張ではなく、授業の中で自然に子どもが惹かれていくような内的緊張が必要だということを改めて感じた。確かに、いくら号令でしっかりと挨拶ができて授業中に良い意味での緊張が解けてしまっただけでは意味がない。荒れた学級では、子どもが授業時間になっても席についていないことも多いだろう。その時に、ただ上から叱りつけたりするのではなく、そもそも号令という手段ではなくて授業に入って子どもを惹きつけること、そこから子どもが自然と緊張感を持つような授業をすることの大切さを感じた。

「荒れた」学級、というのはできることなら経験しない方がいいし、落ち着いた授業運営・学級活動ができることはもちろんいいことである。しかし、この本からその経験が必ずいつか役に立つこと、荒れた子どもたちを接することによって教育活動の本質や大切なことを直に感じることができる、ということがわかった。また、うまくいかないことばかりでも、余裕を持ち焦らずゆっくりと子どもとともに成長していくことを心がけるべきだと感じた。そして、子どもを「待つ」こと。「待つ」といのは、これまでの大学での講義や教育実習でも教えていただいたことだが、子どもの成長や反応をあせらずに「待つ」期待通りにならなくても「待つ」、その辛抱強さと「何とかなるさ」と構えてゆったりとした姿勢を教員として持っていこうと感じた。私の子ども時代とも、どこかまた今の子どもとは違うというのは教育実習やボランティア先でも感じたことがある。時代が違うのだから当然なのだが、本質は決して変わっていないはずである。そして、私もこれからの長い教員生活をスタートさせる上で壁にぶつかることは何回でもあるはずだ。その時に、この本から学んだ「子どもへの接し方」「教員としての自己の持ち方」を常に問い続け、ゆっくりと成長していける教員でありたい。

『「荒れる」子どもたちに教えられたこと』

今泉博著、ひとなる書房、1998

(こもだ ゆうな・札幌校4年)